
相談者は今日もやられ役

ペンシル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

相談者は今日もやられ役

【Nコード】

N3057BA

【作者名】

ペンシル

【あらすじ】

一人の女子高生は、誰かに相談したかったのだ。そこにたまたま男がいた。だから相談した。そして知らずの間に解決した。独りで。そういったこともあって、今回も、女子高生は男に相談するのだ。

(前書き)

初めての恋愛小説……と言っているいいものでしょうか。とても味わ
いのいい作品とは言えませんが、ご賞味ください。

「やあ、こんにちは。久しぶりだろ？ あはは。お茶は出せないけど、ゆっくりしていきなよ。」

「あはは。相変わらず酷い所ですまないね。しかし、人目に付かないほうが人気がある商売なんだ。商売というか、商談かな。似たようなものだけど、性質は違うと言おうか。僕は一応大人でね、企業秘密だとか、客のプライバシーの問題だとか、そういうことも考えなくちゃいけないから、あまり詳しくは喋れないんだ。」

「ああ、無論のことだけど、君からお金を取るつもりはないよ。あはは。僕は君が生み出す利子をもらえれば、本当にそれでいい。」

「いやいや、こっちの話。気にしないで。悪いようにはしないから絶対。あはは。前回の仕事ぶりから知っておいてもらいたかったぜ。人が人を信用して良いということを、君はこの間学んだはずだろうに。やれやれまったく、困った女子高生だ。」

「僕に会いにきたということは、まあ当然、相談したいことがあるんだよね。ないとは言わせないぜ。君の顔は、そういう雰囲気纏っている。正直こっちは、『またか』ぐらいにさえ思うよ。あはは。君はとてもわかりやすいんだもん。最初に僕と会ったときと同じ顔をしているぜ。困って困ってどうしようもない　　そう言いたげな顔。」

「こんなことを言われてもわからないかもしれないけどね、経験のなせる業だよ。占い師が占いをするのと同じように、相談を受ける役柄の僕は、相談を受けるのさ。あはは。占い師が占いのエキスパ

「トなら、相談を受ける僕は相談を受けることのエキスパートだ。安心していい。」

「あはは。それでなんだっけ、女子高生。前回の君の悩みは、恋愛ごとだったかな？」

「ああ、失礼失礼。悩みなんかじゃない、単に相談したいことだった。あはは。これは大きな差だよ。同じ猫かと言っても、ただの白猫とホワイトタイガーくらい違う。うん、これは僕の勘違いというか、多大なるイジメに匹敵する問題だよ。悪かった。許してほしい。」

「さて、それで女子高生、今回の相談ごとも、恋愛ごとかい？ あはは。違うかな？」

「うん、やっぱりそうか。君はどうも心が傷つきやすそうだからね。もうちょいメンタル面を鍛えるといい。ホラー映画なんて見ちゃってさ。そのときはぜひボーイフレンドでも誘ったらどうだい？ あはは。きつと楽しいだろうぜ。」

「まあ、相談ごとが相談事だからね。本来僕は焼き直しという作業を嫌うんだが、仕方がない。誤解されても困るからね。なに、仕事術だよ。あはは。ただの処世術だ。問題を回避するために手を打つのは、大人の基本だよ。なんて、聡明な女子高生にはわかることだったかい？ まあなんにしろ、繰り返しになるけれど、もう一度言っておこう。」

「恋愛ごとはそもそも僕の専門外だ。だから解決できるかどうかはわからないし、少なくとも助けにはならないだろう。アドバイスだけ。あはは。少しだけ手伝う程度だ。たったそれだけで、君には救

われてもらわなきゃいけない。いや、実はもう一つ厄介な相談を受けててさ。そっちに時間を割きたいんだよね。

「あはは、『またか』って顔をしたね。そうだ、そうだよ。僕は前回も同じ話を君にした。一言一句、間違わなかったと思う。そのとき咄嗟に言った台詞を覚えているなんて、僕はアドリブと記憶が得意なのかもしれないね。あはは。格好さえよければ俳優も似合うとは思わないかい。なんて自画自賛、まともに答えなくていいよ。君らしく苦笑していればいいんだ。

「え、僕の専門はなんだって？　おいおい、そんなことを訊いても仕方がないよ。聞いても仕方がないからね。むしろ、今は知ると毒になるかもしれない。あはは。どうせ大人の事情だ。生臭い大人の話。夢見る乙女の高校生にはまだ早いぜ。……おっと、今は悪夢を見る乙女だったかな。

「ま、僕の専門は狭く深いんだ。あまり気にするなよ。世の中全てを知る必要なんてないんだって、どこかの誰かがいつか言ってたぜ。あはは。理想論だとは思っけどね。だって、単語は知らないより知っていたほうがいいに決まってるよ。文章になると、そして話となればそうとは言い切れないけどね。なぜって、悲劇は見ないほうがいいだろう？　悲しくなるから。

「思うんだけどさ、悲劇をドラマで見る人や、あるいはジェットコースターやお化け屋敷、怪談を好む人たちって、どうにも歪んでいないかい？　悲しいとか怖いとか、そういうのは全部負の感情だろうに。あはは。スリルを楽しむ人間って言うのを、僕はどうにも理解できないよ。ま、例外なく君も僕も、等しくして人間なんだけどね。まったく、動物界後生動物亜界脊索動物門羊膜亜門哺乳綱真獣亜綱正獣下綱霊長目真猿亜目狭鼻猿下目ヒト上科ヒト科ヒト下科ホ

モ属サピエンス種サピエンス亜種 学名で言えばホモ・サピエンス 知恵のある人つてのは厄介な存在だぜ。

「うん？ どうしたよ、啞然としちゃって。僕が無学だと思ったかい？ 最近の女子高生は早計屋さんばかりなのかな？ ホームレスだったら、ただの無知だと思つなよ。なんて、君は思つてないか。だから僕に二度も相談してきたんだもんな。あはは。どうも最近疑り深くなつていけないよ。年のせいかねえ。とはいえ、僕は一応二十七歳なんだけど。

「懐かしいね。僕も昔は恋をした。まあ、少し聞いてみてくれ。つまらないと思うなら途中退席してもらつて構わない。また、僕が独り言を呟き終わった後に再入場して頂戴。あはは。僕は去る者を追うことはしないんだ。たとえそれが獲物でもね。チーターなのさ。

「僕が高校生の頃だ。僕は、後の僕が好く彼女 Xさんのことを特に何とも思つていなかった。あはは。強いて言うならば、友達でなく当然恋人でもなく、そして知り合いというにはあまりにもお互いを知つていない。赤の他人が妥当な表現であるという、超微妙且つ悲しい関係だったよ。とても真つ赤だったぜ。

「ところがまあ、それは真つ赤な嘘だったんだよ。あはは。面白くも何ともない冗談だろう？ その当時、僕はその子のことが好きで仕方がなかった。でも、それを認めなかった。というか、無意識に封印していたんだ。だって、『僕はXさんのことが好きだ。よし、告白しよう』じゃあつまらないだろ？ 受け入れられても、拒絶されても。

「とりあえずまあ、『僕は彼女のことをどうとも思つていない』とか言つておけば、少なくとも僕の物語は恋愛小説ではないわけと考

えたんだ。今でこそ違っけど、あのうざったくて長ったらしい雰囲気とか、そういうのは僕の好みじゃなかったからね。あはは。別に、当ても恋愛小説を否定するつもりはなかったんだけどさ、あくまで好みじゃなかったという話。

「むしろ、あれはあれで素晴らしく機能的なものではないかとさえ考えていた。動を静で表すべき小説で、動を表す『機能』の意味合いを表すのはおかしなことかもしれないけど、しかし小説は『静で動を表す』ものであるべきだとも思えるから、結果変わらないんだろうな。なんて、あまり考えたくはない戯言が頭をよぎりがちな心持でいたんだけどね。あはは。良い青春だったよ、まったく。

「恋愛小説を静として捉えるか、動として捉えるかで随分と対応が違っと思う。対応というか、解釈かな？ 例えば、僕は理詰めで物事を考えるタイプだから、恋愛小説は静として捉える。まあその当時、僕は恋愛小説をあまり読んだことがなかったけど。しかし、君を代表する女子高生……が多いと思うけど、「恋してなきゃ死んじゃう」とか「恋をしていない人生はつまらない」とか、恋愛をイベント的なものと観念付けて生きていけば、動で捉えるようになるのではないかと僕は考察した。当時はね。結局考察っただけだったけど。意味なんてなかったし。あはは。

「静と動のどちらで捉えるにせよ、受身となる恋愛小説そのものは、書き手の考え及び経験の蓄積によって書かれている場合が多いんだ。すなわち、それを読むということは明らかに読み手の脳内で組み立てが行われる。シミュレーションに移行するのだから、なるほど、恋愛小説を読むという行為は経済的で機能的なものだ。などと結論付いたわけだ。あはは。最近はいいいねえ、電子媒体で本が読めるんだから。この年になると、携帯小説はあまり合わないんだよ。純愛小説を紙で読むのが好きなのさ。

「話はちよつとそれるんだけど、そう考えると好きな人に恋愛小説を書かせるというのは、非常に理にかなった行為であると言えないかい？ 先述のとおり、恋愛小説は書き手の考えや経験が元になることが多い。あはは。加えて言うなら、それに願望がこもることもある。すると、相手の望む恋愛の基準がわかったりするもんだ。全うな恋愛小説だったら、の話だけでもね。」

「さて、長々と前置きをしたけど、ここからが僕の恋愛物語だよ。茶番は終わって、本番を始めるわけだ。あはは。甘酸っぱ過ぎて舌が溶けたり、発狂したくなったりの恋愛だったね。」

「なんて、そんな化学薬品や怪しいお薬を使用した物語じゃないや。しかし当時の僕のたくらみであつた、『恋愛小説らしくない恋愛をする』というのはあつたという間に瓦解した。いやね、テンプレートとさえ言えるような、そんな展開だったんだよ。あはは。今から思えば、あの時は春だったのかもしれないな。」

「僕には、年の離れた親友がいてね。僕と似たような男だった。僕と同じようにホームレスで、恋愛相談を引き受けてくれたよ。彼は確か、なんでも屋を営んでいたかな。そこは僕と違う。僕はあくまで相談を受けるだけだから。あと、性格も違ったかな。あはは。僕はこういう社交的な性格なんだけど、彼は人嫌いの面倒くさがり屋でね。早い話が変人だった。ま、彼から見たら僕のほうがよっぽど変人なんだろうけど。」

「アニメの話をしていたな、あの人は。僕は主人公。あはは。文句なしに、エンディングテーマで登場人物の欄のトップを張るような主人公で、ちなみにヒロインは不在。回毎に順不同で、女の子の名前が出てくる。で、僕は誰に恋したんだ？ そう訊かれたよ。」

「当時、僕は友達が多かった。小学生は友達が百人作るうと努力するらしいけど、小学校の時には四百人くらいかな？ 中学で千人を超えて、高校からは数えてない。意味がなかったから。あはは。意味もなく友達を作るなんて、そんな悲しいことはないのにな。」

「友達のいない人から見れば、僕は羨ましがられるべき人間で、やっぱり皆の人気の的ということになり、アイドルだったんだろっけ。けれどね女子高生、好かれることと愛されることではまったく違うんだよ。同様に、好くことと愛することもまったく違う。しかし、好くことと好かれること、愛すことと愛されることが表裏一体かと言われれば、それもまた違うんだ。あはは。わかるかな？」

「あはは。早い話が、僕は誰かに愛されることがなかったんだ。」

「いや、正確に把握しているわけじゃない。あはは。でも、人脈が異常なほどある分、僕を好きになった人がいれば、その噂は流れに流れて僕にたどり着いたはずなんだ。きっとね。もちろんたどり着いていない可能性もあるし、誰にも言わなかった可能性だってあるから、断言はできないけど。」

「しかし愛されることのなかったこの僕は、不覚にもAさんを愛してしまっていたんだよ。変人のあの人　轟木とんぼという苗字だったに気づかされるまで、僕は知らなかったんだけどね。あはは。」

「それで、高校二年生のときだったかな。クリスマスの直前に告白した。轟木に言われたとおり、自分の言葉で精一杯に伝えたさ。およそとても、言葉として伝わらなかつただろうけどね。あはは。必死さは伝わったらしくて、成功したよ。付き合い始めた。クリスマスは二人で会って、楽しく映画を見に行った。年越しも一緒に迎え

たよ。周囲から見ればバカカップルだったんだろうなあ。今語っているだけでも、ちょっと恥ずかしくなってくるよ。

「Xさんは奥手だったこともあって、冬休みに僕たちの恋愛もとい熱愛がバレることはなかった。僕がいかにも人脈を持っていたとしても、言わなければ伝わらないわけだから。奇跡とも言うべき幸い、知り合いに見つかることもなかったしね。あはは。まあバレることそのものは怖くなかったんだけどさ。何より好きだったから。

「で、冬休みが明けて、三学期の一番初めだ。彼女が友達と話しているのを見てね、凄い笑顔だったんだ。見たこともないような笑顔を浮かべていた。あはは。僕はそのとき思ったんだ。『あれ、もしかしてXさんは僕のが好きじゃないのかな?』って。いやまあ、おかしくはないんだ。だって、僕から告白したんだし、彼女は交際を了承したけれど、たぶん当初、僕のことを友達以上として好きではなかったんだろ。

「そのとき僕はこうも思ったよ。『僕は、彼女を縛っていいのかな? 僕は彼女を幸せにできるのか?』ってね。高校生ながらに必死で考えた。あはは。当然今度は、轟木の力も借りなかったよ。何せ、彼女を縛ったのは僕の責任だからね。まあ彼は、僕に対して『お前はきつとアニメで言う「女子生徒A」に恋をしたんだろ?』なんて皮肉を言ったけど。ところで、責任は自分で始末をつけるに限る。女子高生も覚えておくといい。

「というわけで、僕はその当日に彼女と別れた。罵詈雑言を浴びせて、僕を嫌うまでに言った。彼女は泣いていたよ。あはは。なんて、こればかりは笑うわけにいかない。本気で傷つけたんだ。僕みたいなクズ男、死んだほうがいいとさえ思ったし、今も思ってるよ。

「彼女は誰かに相談したらしい。およそ二週間と少しの恋愛物語を。どどん広がつた。そのときばかりは僕も恐れたよ。あはは。厚かましい、そして愚かしい話、僕は友達全員に嫌われることを恐れたんだ。それくらいの報いは当然なのにね。」

「ところがいつからか、その話題の悪役は僕でなくXさんにすり替わっていたよ。彼女は僕の友達全員に嫌われた。彼女が一番に相談した、彼女の友人からも嫌われた。僕からも嫌われたと思い続けた。そのまま一年と少しが経って、卒業式。彼女の周りには僕以外の誰もいなかったよ。僕はあくまで好きだったから、彼女を見てはいたんだ。そして悼んだ。誰も死んでないのにね。見かねて僕はその日、彼女に声をかけたよ。驚いたことに、彼女は怒っていなかった。彼女のそんな優しさに、僕は惹かれていたのかもしれないけどさ。あはは。」

「怒ったどころか、彼女は僕に好意を抱いていた。抱く相手がいなかったからか、それとも僕のことを好きになれば救われると勘違いしたか、とにかく僕は告白された。断ったけどね。何せ貶めたのは僕だから。ならば友達からということ、彼女は僕の友達になった。あはは。復縁だよ。赤の他人から恋人に、そして知り合いに落ちてからの友達だ。」

「今も友達だよ。あはは。これがハッピーエンドだとは思えないけどね。僕はこんな風だし。」

「とまあ、バッドエンドでもデッドエンドでもない、しかし結構な恋愛物語だったんだが。感想はあるかい？ できればないほうがいいけどね。とか言っつて！ あはは。」

「で、君の相談事は？ うん？ もういいって言うのかい。もしかして、僕の不幸らしさを聞いて、自分で乗り越えようとも思ったのかな？ あはは。それはそれでいいけどね、女子高生、もし何かあったら、絶対に誰かを頼りなさい。僕じゃなくてもいい。身近にいた人に頼ったほうがいい。君はその勇気を、前回は学んだんだろ？」

「よし。それじゃあ頑張ってきてね。あはは。僕は僕で、もう一つの難題にチャレンジしてるよ。気が向いたらまた来なさい。今度はペットボトルのお茶でも用意しておくよ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3057ba/>

相談者は今日もやられ役

2012年1月8日12時51分発行